

フロリアード2012に見る最新花き情報 I

～オランダ・デンマーク花き生産事情を中心に～

【平成24年12月17日】

新井聡（農業総合試験場園芸研究部花き研究室）

【要約】

オランダで開催されたフロリアード2012に研修生として参加し、日本国政府出展ブースの装飾・管理、コンテストの運営補助を行うとともにオランダ・デンマークの花き生産事情の情報収集を行った。

1 フロリアードについて

フロリアードは、オランダで10年に1度開催されている国際園芸博覧会で今回で6回目となっている。今回は、フェンロー市において「自然と調和する人生」をテーマに2012年4月5日から10月7日（204日間）まで開催され、35カ国・90社が参加した。開催主体は周辺自治体やオランダ園芸協議会等で、会場規模は約66haである。研修生は生産、流通、小売、デザイナー、公的機関等から構成され、展示装飾の他、2週間おきに行われるコンテストの運営補助を行った。



写真1 日本国政府出展

2 デンマークの花き鉢物生産事情について

デンマークの鉢物生産においては人件費圧縮のため、オートメーション化が進み、苗、挿し穂の生産は海外で行っている。また、輸送効率を上げるために小鉢化が進み、PRは統一ブランドの設定やマーケティング会社に委託している。大規模化が進みスーパーとの直接取引が増加している。

表1 デンマークの花き鉢物生産の特徴

視察先	栽培品目	生産規模	経営の特徴
Thoruplund社 (写真2)	シャコバサボテン、カンパニユラ	施設3.9ha 年間600万鉢	・シャコバサボテンの苗生産をスリランカで行っている ・他農家と「Living Color」というブランドで販売・PR
Nældebakken社	ダリア、リンドウ、コチョウラン、ガーベラ、オステオスペルマム	施設4.5ha	・上記と同じ「Living Color」で販売。 ・コチョウラン以外は育種も行う ・オステオスペラウムの挿し穂はタイで生産
PKM社 (写真3)	カンパニユラ、シャコバサボテン、ラベンダー、クリスマスローズ	施設19ha 露地5ha	・カンパニユラの挿し穂はポーランドで生産 ・シャコバサボテンの挿し穂はケニアで生産 ・施設は自動化が進んでいる



写真2 シャコバサボテンの生産状況



写真3 自動で挿木を行う機械

3 オランダの花き事情

オランダの花き生産においては補光、炭酸ガス施用、ミスト等の設備が揃い、機械化が進むものの単純作業は外国人の労働力を利用している。

表2 オランダの花き生産の特徴

視察先	栽培品目	生産規模	経営の特徴
Floralis社 (写真4)	トルコギキョウ	施設1.7ha 年間5回の 周年生産	<ul style="list-style-type: none"> ・天然ガスによるCHP（※1）により、20℃暖房、12,000lxで補光、1,000ppmで株元への炭酸ガスの局所施用を行っている ・販売は11の生産農家で「Four Seasons」のブランドで販売
DAILY SUNSHINE社	スカシユリ ヒマワリ	施設1ha 年間6回の 周年生産	<ul style="list-style-type: none"> ・施設では冷却や湿度確保のためミストを導入 ・露地でヒマワリを生産 ・ポーランド人を6人雇用 ・全量市場出荷
A. BAAS社 (写真5)	ビオラ等の花壇 苗、鉢花	施設25ha 年間1億鉢	<ul style="list-style-type: none"> ・従業員数はパート等を含めるとポーランド人を約100人雇用 ・ベンチを使用せず、フォークリフト等を使って、直置きで栽培 ・施設の70%は薪を使った暖房（ボイラー設備の30%はEUが補助） ・販売は、スーパー8割、市場2割
Van der Voort社	スパティフィラム	施設5.9ha (生産4ha、 種子及び苗 生産1.9ha)	<ul style="list-style-type: none"> ・種子生産はタンザニアでも行っている。 ・播種、鉢上げ等は自動化 ・品種は全てF₁で、将来は苗に加え、種子の販売も検討

※1 Combined Heat and Power：トリジェネレーションの略で、天然ガスの燃焼により、電力、熱、炭酸ガスを生み出す。



写真4 トルコギキョウの生産状況



写真5 ポットマムの生産・出荷状況

4 日本の生産者への提言

日本との最も大きな違いはオートメーション、種苗の海外生産等、徹底したコスト削減、育成品種のパテント収入等にある。

また、生産者の規模拡大の背景に苗生産業者の存在も大きく、分業、効率化によりそれぞれ得意分野に集中でき、大規模化を支えていると考えられる。

オランダ、デンマークの花き生産の場合、今後消費が見込まれる東ヨーロッパ等に高速道路網とリンクした陸路が整備され、他国への輸送コストが割安であること、また品質よりは回転率重視の低コスト生産、気象条件の違いや天然ガス主体の暖房等を行っており、全てをそのまま日本の花き生産が参考にするのは難しい。但し、各生産者とも業界一といわれるような技術をいくつかもち、そこに経営資源を集中的に投下し、それ以外は外部に委託する経営戦略や種苗等知的財産によるパテント収入、またPRは業界全体で取り組む姿勢等、参考になる点はいくつかあると思われる。また、補光、ミスト、炭酸ガス施用等の環境調節機器の普及と利用技術が進んでおり、普及途上にある日本の花き生産でも導入に向け、試験研究機関等からの情報収集が今後重要になってくると考えられる。